

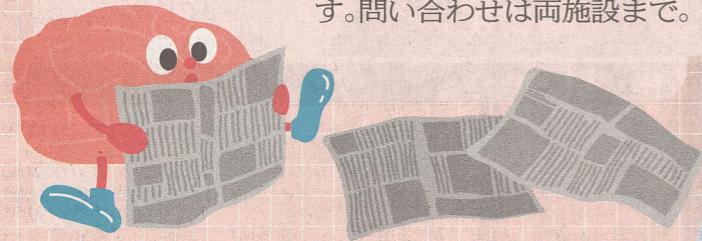
新聞って役に立つ

6月22日 多治見で講演

中日新聞社は6月22日、酒井邦嘉教授の講演会「読書は脳を創る」(多治見市教育委員会など共催)を、パロー文化ホール(多治見市文化会館)で開催します。

新聞や本といったアナログな媒体が、子どもたちの成長や暮らしの豊かさにとってどういった意味を持つのか、デジタル全盛の時代に改めて考えます。

午後2~4時。参加費は無料。ヤマカまなびパーク=0572(23)7022、パロー文化ホール=0572(23)2600=で整理券を事前に配布します。問い合わせは両施設まで。

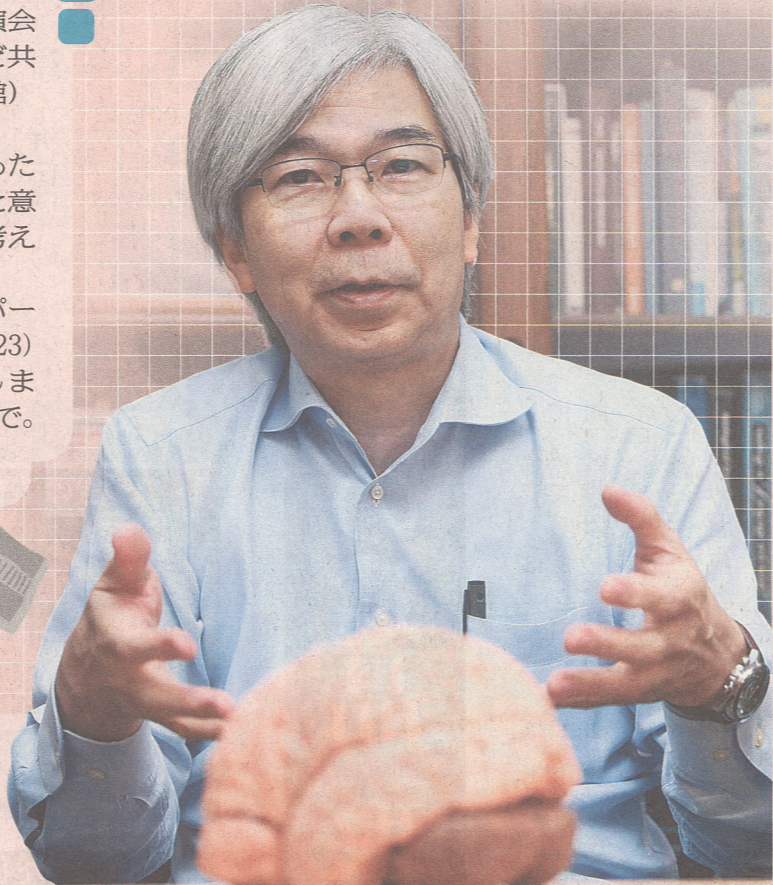


新聞読めば 読解力アップ

新聞や紙の本に親しんでいる生徒は読解力が高い。経済協力開発機構(OECD)が2018年、15歳を対象に実施した学習到達度調査(PISA)で、その事実が示された。

新聞を「週に数回」もしくは「月に数回」読む生徒の読解力の平均点は531点。「月に1回くらい」かより頻度の低い生徒の平均点を33点上回った。

本を読む媒体別の結果では、「紙で読むことが多い」と回答した生徒の平均点は536点。「デジタルで読むことが多い」より60点高かった。調査はOECD加盟国など79カ国・地域で実施した。



東京大大学院総合文化研究科 酒井邦嘉教授

インターネットを開けば、無料のニュースが次から次へと流れる昨今。自宅でくつろぐひととき、外出先の隙間時間に、スマートフォンで情報を入手できるようになりました。でも、新聞もまだまだ捨てたもんじゃない。ネット時代に新聞が果たす役割について、専門家と一緒に考えました。(川添智史)

記憶の定着 ネットより紙

テレビやインターネットなど多様なメディアが誕生してきた中、新聞は百数十年の歴史の中でほとんど形を変えていない。東京大大学院総合文化研究科の酒井邦嘉教授(59)は言語脳科学で、「思考力を高める上で、新聞や紙の本は人間が生み出した技術として最良のもの」と話す。

酒井教授が注目するのは、活字が伝えることのできる情報量の少なさだ。例えばこの会話。妻「あなたって、いつもそれしか言えないの?」夫「そっじゃない」肯定なのか、否定なのか、字面だけでは情報が足りない。脳はこうした部分を想像で補おうとするという。

「読む」とは曖昧なところを自分の言葉に置き換えるプロセス。言語能力を鍛え、あらゆる学力の基礎になる」と説く。新聞を読むことでそうした力を高められるとみるが、インターネット上の活字のニュースは別だという。文章が広告で隠されたり、他の記事への誘導リン

クが目立つたりするニュースサイトの記事は、「腰を落着けて読むようにできていない」と指摘。「新聞は記事について自分の考えを巡らせられる『ゆとり』がある。ネット記事とは雲泥の差」とする。

「ネット記事は主要ニュース以外は見過ごされがちだが、新聞は小さな記事でも紙面を開けば目に入る。知人の訃報など、大ニュースでなくても読み手によって大事な情報になる」と

入力された質問に文章で返す「チャットGPT」などの生成人工知能(AI)が急速に発達し、教育現場にも導入されつつある。酒井教授は、社会の潮流が「人間から考える力を奪いかねない」と警鐘を鳴らす。

教育現場に生成AI 危惧

まっとう危惧しています。ネットで検索エンジンが使われ始めてから、学生たちは、大学の講義で難しい言葉が出ると即座に検索するようになりました。レポート課題を通じて、学生自身でじっくり考える時間を潰してきましたが、生成AIが使われれば、その機会すら失われてしまふ。真に新しい発見やアイデアは、考えることにエネルギーを費やす中から生まれます。なのに、生成AIの導入は「自分の頭で考えなくてもいい」という価値観を伝えることになる。人々の思考力は落ち、人間の衰退すら招くでしょう。

考える力 養うのは対話

「考える力を養う教育とは。やはり、対話です。高校までは、子どもの理解の度合いを見極めて必要な言葉をかける。大学なら、議論を戦わせることで真実が見つかる面白さを学生に感じてもらうといったことです。心を理解できないAIは教師の代役になりません。新聞を開くことが第一歩です。記事は後で何度でも読み返すことができる。内容を咀嚼する過程は、言わば記者との疑似的な対話です。これは記者が責任ある書き手だからこそ成り立つ。AIの真偽不明の情報が氾濫する時代。新聞の役割は増えています。」

新聞を読む頻度と読解力の関係

頻度	平均点
週に数回、月に数回	531
月に1回くらい、年に数回、まったく、またはほとんど読まない	498

本を読む媒体と読解力の関係

媒体	平均点
紙で読むことが多い	536
紙でもデジタルでも同じくらい	520
デジタルで読むことが多い	476
まったく、またはほとんど読まない	458

※2018年の学習到達度調査(PISA)から

